

長崎被爆・戦後史研究から見えてくるもの

1. はじめに

1-1. 本報告の趣旨

- 長崎被爆・戦後史研究を通して見えてきた課題 = 「継承」について
→ 報告者の研究テーマは、広島・長崎の戦後史（復興史）であり、「被爆体験の継承」を直接的な研究のテーマとしてない。
❖ しかし、研究に取り組む中で、向き合っているのは「継承の問題」

1-2. 向き合うこととなった「継承の問題」について

- ・この数年取り組んできた被爆者への聞き取り調査の中で「継承問題」と出会う。
具体例として（研究2例）
- ① 沖縄の被爆者：“自分たちの体験や経験は継承されるのか”
- ② 長崎（浦上）の被爆者：“自分たちが大事に思う復興の歴史が消えてしまわないか”
→ 「継承の問題」と直面。出会った個別の証言をいかに一般化できるのか。
「継承」の際に、必要なこと、求められることとは何か。

2. 沖縄の被爆者への聞き取りの中で

2-1. なぜ「沖縄の被爆者」について報告するのか

- ・沖縄の被爆者とは？
- ・沖縄の被爆者の約70%は長崎で被爆、その多くが三菱関係で働く10代後半の男性
⇒ 長崎にやってくることから、長崎を出ていくことを含めて、長崎の被爆と捉える。

2-2. 沖縄の被爆者への聞き取り調査

- ・2012年6月～2020年1月まで約20名の「沖縄の被爆者」に聞き取り調査を実施
→ 現在においても自分が被爆者であることを知られることを憂慮。
- ・聞き取り調査から見えてきた沖縄の被爆者の「継承の問題」
→ 沖縄戦という地域の大きな戦争体験が主として語られる中で、被爆体験はそもそも少数者であり、その内容の特殊性もあって、理解を得られなかったという。そのため戦後沖縄史の中で沖縄の被爆者は声を上げることが控えざるを得ない状況に。
⇒ 自分たちの体験や戦後の経験は継承されていくのかという不安を抱いている。証言と出会った報告者はどうすれば沖縄の被爆者の声を「継承」できるのか、について考察をはじめた。（近刊予定）

3. 長崎（浦上）の被爆者への聞き取りの中で

3-1. 浦上での聞き取り調査の中での出会い

- ・長崎の浦上地区で2003年から「復興」について聞き取り調査を行っている際に耳にした人物
→ 「ヨゼフ様」（キリスト教修道士・岩永富一郎）：浦上（本原）に住む人びとから常に信望を集めている。しかし、文献史料は非常に限られていた。
⇒ “誰もヨゼフ様について歴史を残していないし、このままでは自分たちにとって大事な歴史が消えてしまうかもしれない”という証言を聞き、報告者なりに引き受けて聞き取り調査を実施し（2014年～2019年）論文を書くことに。（近刊予定）
❖ 「継承」につながるか。

3-2. 永井隆と岩永富一郎

- ・浦上の信徒の代表として著名な永井隆
- 現在においても、彼についての議論は繰り返し語られ、更新される。
- ・浦上（特に本原）においての聞き取り調査において人びとが繰り返し語る岩永富一郎については記録化がなされておらず、「継承」されない可能性がある。
- ⇒永井隆に収斂されない浦上の信徒たちの歴史がある。つまり、戦後の長崎史（浦上史）の複数性である。

4. おわりに

- ・沖縄の被爆者や浦上の被爆者の聞き取り調査から見えてきたもの
 - ナガサキの複数性。単色で塗りつぶしてはならない長崎の被爆と戦後史
- ・自分たちの体験や経験、教訓、歴史を残して、伝えて欲しいという声（「継承」との出会い）
- 継承の問題と出会うまでの報告者の道のり
 - ①「被爆者」の被爆体験と戦後史の聞き取り調査を開始（記録化の作業）。
 - ②しかし、彼女たち/彼らの証言は「被爆」や「原爆」に限られたものではない（個別的な証言との出会い）。彼女たち/彼らが残そうとしているものとは何か。
 - ③そこから導き出される思想化（一般化の作業）
- ⇒個別化と一般化の作業を行き来する必要性

- ・「何を継承するのか」という問題
 - 被爆した時の体験のみを受け継げば良いのか？
 - ⇒「被爆者」は「被爆体験」のみを語っていない。「人間とは何か」「人間とはどうあるべきか」という大きなテーマに挑んで証言をしている。
- 被害者という認識に留まらない。原爆被害から生き抜き、問題を証言（告発）する人びととしての被爆生存者（atomic-bomb survivors）
核時代や暴力が続く時代にあるからこそ、被爆者が自らを被爆者として主体化し「核時代を終わらせる」「戦争反対」として活動し、証言している。

- ・証言を聞き取る際に、自らも一人の人間として何ができるだろうと自分なりに考え始める（主体化）。
- 何を自分が受け取るか。引き受けて伝えていくか。
- ⇒被爆の「人間的悲惨」に対して、「受け手」の世代の人間が、主体的に迫っていく努力が「継承」の作業の根幹に位置付けられるのではないか。

- ・語る者と受け取る者、両者の関係が成立して、伝承／継承は成立（安田【1963】）。だからこそ、被爆体験の「継承」も体験者の伝承ばかりにフォーカスするのではなく、「継承したい」と思う次の世代の育成が必要。

【参考文献】

- 安田武『戦争体験』未来社、1963年。
山川剛『被爆体験の継承 ナガサキを伝えるうえでの諸問題』長崎文献社、2017年。
桐谷多恵子「沖縄の被爆者問題の再考察——現代における証言の意味」(近刊予定)。
桐谷多恵子「浦上の「受難」と「復興」における文化の存続——キリスト教修道士・岩永富一郎の活動を中心に——」(近刊予定)。